F-1　統語的複合動詞「V-ぬく」の意味構造と統語*

日高俊夫
武庫川女子大学 / 神戸松蔭言語科学研究所

要　旨

統語的複合動詞「V-ぬく」における「ぬく」の意味構造の形式化と「V-ぬく」の統語構造を明らかにすることを目的とする。統語構造としては、影山 (1993) が話者によって VP 補文構造と V′ 補文構造のどちらを取るかにおいて曖昧性があると分析し、由本 (2005) が V_0 補文構造として分析しているのに対して、本発表では、「られ」を使役の意味を表す形態素としても分析する畠山・本田・田中 (2018) を援用することによって、「ぬく」は一律に VP 補文構造を取ることを示す。意味の面では、Pustejovsky (1995) の生成語彙意味論の枠組みを用いて２つの「ぬく」の語彙登録を仮定し、形式的・構成的な意味合成の方法を提案する。そのことにより、先行研究（姫野 (1980, 1999), 森田 (1989) 等）における直観的な分類に対して理論的根拠づけを与えつつ再構成し、文法化の側面からもその分類の妥当性を示唆する。

1　本発表の目的および主張

目的：

- 統語的複合動詞「V-ぬく」の統語構造を明らかにするとともに、「ぬく」の意味構造を分析・形式化する[1]。

主張：

- 統語的複合動詞を形成する (補助) 動詞「ぬく」に２つの語彙登録を仮定し，形式的・構成的な意味合成を記述することにより，先行研究 (姫野 (1980, 1999), 森田 (1989) 等) における直観的な分類を理論的に検討し、その分類を再構成する。
- 畠山, 本田,・田中 (2018) の「られ」が使役の意味を担う形態素であるとする分析（このように「られ」が実際には使役の機能を果たす受身のことを以下では便宜上「受動使役」と呼ぶ）を基盤に、「-ぬく」は VP 補文をとることを主張する。
- 以上のことにより、同じ話者内でも、「～られぬく」が可能な場合と不可能な場合があることと、その理由を説明できる。

2　統語構造

2.1　先行研究：影山 (1993)、由本 (2005)、岸本 (2013)

■ 影山 (1993)

統語的複合動詞としての「V-ぬく」「V-終える」では、複合動詞全体の受身と補文内部の受身が相補分布せず、両方の受身が可能であることから、話者によって V′ 補文と VP 補文の間で曖昧であると分析 。

(1) ボクサーは自分からは手を出さず、最後まで 殴られ抜いた。　　影山 (1993: 166)

(2) a.?ボクサーは 自分からは手を出さず、最後まで殴り抜かれた。
　　b. ボクサーは最後まで (チャンピオンに) 殴り抜かれた。

疑問点１：「～されぬく」が容認される場合、補部イベントに対する主語のコントロール性に原因があるのでは？

- (1)：「ぬく」の主体は主語ボクサー？
- (2b)：「ぬく」の主体は相手ボクサー（チャンピオン）？

*本研究は，JSPS 科研費課題番号 16K02652「動詞の多義性と文法化の理論的記述・分析―命題的意味，非命題的意味，視点的意味―」の助成を受けている。

[1]「引きぬく」等の語彙的複合動詞との関連も興味深い問題であるが、本発表では考察の対象外とする

疑問点２： 同じ話者の中でも両方の受身が可能であったり、補文内部の受身を許さなかったりする例があり、やはり「ぬく」主体の意図性が関与しているように思われる。

(3) a. ケンは数年に渡って社長に { 口説きぬかれて/?口説かれぬいて } 入社を決意した。
b. ケンは彼女の言葉に { 騙しぬかれた/?騙されぬいた }。
c. ケンは彼女の言葉にわざと {?*騙しぬかれて/騙されぬいて } やった。
d. ケンは担任の先生に 2 時間に渡って叱りぬかれた。
e. ケンは?(友達の身代わりで) 担任の先生に２時間に渡って叱られぬいた。
f. その噂は 10 年もの間 { 信じぬかれた/?*信じられぬいた }。

■ 由本 (2005)

V-ぬく：「V-合う」「V-直す」等と共に、統語派生の最初の段階で先行動詞と結合する「V_0 補文型」として分析。

(4) 結果述語や VP 内の副詞に対して V2 の意味作用が及ばない。
a. 彼は 社会人として 出発し直した。
b.?私は 着物で 写真を撮り忘れたので、. . .。 (由本 2005: 184)

(5) a. 彼は 研究者として 生きぬいた
b. 彼はそのレースを 負傷した足で 走りぬいた。

(6) **非対格型：**数量詞 (ALL) と V2(ALMOST) の作用域の関係が２通り可能
a. メンバー全員が行列に並びかけていた時、突然雨が降りだして、記念写真が取れなかった。
(ALMOST > ALL)
b. メンバー全員が一斉に立ち上がりかけた時、突然停電になった。(ALL > ALMOST)
VP 補文型：全部否定の解釈の方が自然
c.?メンバー全員が雛壇に並びそこなったので、記念写真にならなかった。(NOT > ALL)
d. メンバー全員が決められた時刻に行列に並びそこなったので、チケットが一枚も買えなかった。
(ALL > NOT)
(由本 2005: 185, 括弧の記述は発表者)

(7) **V-ぬく：**全部否定しかなさそう → VP 補文型
a. 全員がそのレースを走りぬかなかった。
b. そのレースを全員が走りぬかなかった。

■ 岸本 (2013)

隣接性の条件違反のため、コントロール構文はイディオム解釈が不可能で、PRO には有生の制約がかかるため無生物主語を許さない。

(8) a. この店で閑古鳥が { 鳴きだした / 鳴きかけた }。
b. ♯この店で閑古鳥が { 鳴き直した / 鳴き尽くした }。 岸本 (2013: 148)

(9) a. そよ風が { 吹きだした / 吹きかけた }。
b. そよ風が { 吹き直した / 吹き尽くした }。 岸本 (2013: 150)

(10) a. その店では半年に渡って閑古鳥が鳴きぬいた。（イディオム解釈なし）
[[閑古鳥が [PRO 鳴き] ぬいた]
b.*そよ風が午後じゅう吹きぬいた。

2.2 提案

■ **畠山・本田・田中 (2018)**：多言語で受動と使役が同一形式で表される場合が多く観察される (Washio 1993, 1995) ことから、「られ」に多義性を認め、使役の意味を表す形態素としても分析

(11) a. [$_{s}$ ジョン $_{i}$ は わざと [$_{s}$ トラックに pro $_{i}$ 追突さ] れた]《使役の意味》
b. [$_{s}$ ジョン $_{i}$ は 不運にも [$_{s}$ トラックに t_{i} 追突さ] れた] 《受動の意味》 (畠山・本田・田中 2018: 197)

■ **統語構造**： VP 補文型複合動詞として

(12) 非対格動詞は主語が人間でも不可 → 経験者等の外項が必要
a.*ケンは 10 科目すべての試験に { 滑り/落ち } ぬいた。
b.*ケンはすべての右手の骨が折れ抜いた。
c.*五つ児がすべて生まれ抜いた。
d.*その戦争で家族全員が死に抜いた。
e. ケンはその問題に弱りぬいて、友人に相談した。(心理状態のみ)
cf.1 *ケンは病気で { 弱り / 衰弱し } ぬいて、声も出せなかった。
cf.2 ケンは病気で { 弱り / 衰弱し } きって、声も出せなかった。
f. マリはそのアイドルに憧れぬいて、服装から何からすべて真似するようになった。

(13) 全体の統語構造としては、影山 (2006) を踏襲し、直接受身においても動詞に対する補部名詞句の統語的移動を想定しない「画一理論 (Uniform theory)」の立場を採る。
a. ナオミがケンを騙しぬい (た)。 [$_{AspP}$ ナオミ [$_{VP}$ PRO [$_{V'}$ ケン 騙す]] $_{asp}$ ぬく]
b. ケンがナオミに騙し抜かれ (た)。 [$_{PassP}$ ケン [$_{AspP}$ ナオミ [$_{VP}$ PRO [$_{V'}$ e_i 騙す]] $_{asp}$ ぬく] $_{pass}$ られ]
c. ケンがナオミに騙され抜い (た)。 [$_{AspP}$ ケン [$_{CauseP}$ PRO [$_{VP}$ ナオミ [$_{V'}$ e_i 騙す] $_{cause}$ られ] $_{asp}$ ぬく]

(14) (13c) タイプの文では、「られ」は受動の意味を残しつつも使役[2]なので、主語が補部イベントに対するコントロールを持たないと判断される場合は V1 受身不可
a.?*ケンは恋人に 10 年に渡って信じられぬいた。
b. *その話は 10 年にわたって信じられぬいた。
c. *その子どもは 10 年に渡って容疑者宅に隠されぬいた。

(15) (15b) では、「殴られぬく」主体（動作主/使役主）は「挑戦者」であり、「チャンピオン」はむしろ使役の対象なので、ニは可能だがニヨッテは不可
a. そのラウンドじゅう、挑戦者はチャンピオン { に / によって } 殴りぬかれた。
b. そのラウンドじゅう、挑戦者はわざとチャンピオン { に / ?*によって } 殴られぬいた。
cf. そのラウンドでは、挑戦者はわざとチャンピオン { に / *によって } 殴らせた。

3 意味構造

3.1 「V-ぬく」の表す意味

■ **森田 (1989)、姫野 (1980, 1999)、杉村 (2013)**：V1 が意思動詞が無意思動詞かで「完徹」と「極度」に分ける。

(16) a. **完徹**：意思を「つら ぬく という意味が含まれており、「〜ぬく」は「うごきが持続され最終段階に至ることを示すが、それに対する逆流 (抵抗、困難な条件) のあることがなんらかの程度に予定される (城田 1998: 145)」。逆流に際し、ある期間最後まで当人の強固な意思に支えられて何かが行われることを表す。したがって、期間の長さを示す語を伴うことが多い。
ex. 愛し〜、憧れ〜、いじめ〜、嫌い〜、惚れ〜、憎み〜、恨み〜、口説き〜、信じ〜、疑い〜、だまし〜、誉め〜、鍛え〜、しごき〜、etc.

[2]畠山・本田・田中 (2018) では、使役の「られ」はあくまで使役であって受動の意味は持たないとしている。

b. 極度：「非常に、とことんまで」という強い程度を表す。前項動詞は、人の精神状態を表すもので、マイナス評価を表す語が多い。「〜ぬく」は状態を表すのであるから無意思動詞となるので、「知りぬきたい」「承知しぬいてください」というような意思表現はできなくなる。
ex. 苦しみ〜、困り〜、弱り〜、悲しみ〜、もめ〜、知り〜、承知し〜、退屈し〜、ひがみ〜
(姫野 1999: 186-188)

■ 白石・松田 (2014)：「完徹」も「極度」も根底には同じイメージがあり、それが文脈上で異なって見える。

(17) この用法 (極度) は「完徹」用法のように完了の意味にはならないため、「極度・極限まで」という当該の状態の強い程度を表すと考えられてきた (姫野 1999 他)。この用法がいわゆる「完徹」用法と異なるのは、その行為を行う場所 Y が見えにくい点である。（中略）「極度」用法が「完徹」用法と異なるのは、Y が「状況/状態」であるため Y の終結点が明確でないという点である。（中略）しかし本動詞「ぬく」コアは消滅するわけではなく、この用法においてもやはり (1)X は抗う力をはねのけて進むこと、(2) いずれは終わりが来るであろうということの２点が含意されている。「彼は悩みぬいた」「A 校は苦しみぬいた」などは不完全な印象が残るが、「問題が解決するまで、悩みぬいた」「優勝するまで、A 校は苦しみぬいた」のように Y の終着点を文脈に加えると自然な文となる。(白石・松田 2014: 12-13)

■ 疑問

- 「完徹」と「極度」の分類は妥当か？
- 「困難性」の意味合いをどう扱うか？
- それらを踏まえてどう形式化するか？

3.2 意味構造の記述システム

本発表では、Pustejovsky (1995) の特質構造を修正した Hidaka (2011) に準じ、(補助) 動詞の命題的意味と非命題的意味をそれぞれ TS (Truth Conditional Section) と NTS (Non-truth-conditional Section) として分割した (18) の意味表示を用いる。

(18)
$$\begin{bmatrix} \textit{ARGSTR} = [\text{統語構造における項}] \\ \textit{QUALIA} = \begin{bmatrix} \text{TS} = \begin{bmatrix} \text{FORMAL: 時間的特性，視点に関する情報} \\ \text{CONST: 語彙概念構造 (LCS)} \end{bmatrix} \\ \text{NTS} = \begin{bmatrix} \text{TELIC: その動詞が持ち得る結果状態} \\ \text{AGENTIVE: その動詞が成立するための外的要因および条件} \end{bmatrix} \end{bmatrix} \end{bmatrix}$$

■ 利点

- 影山 (1996) 等で用いられる語彙概念構造 (LCS) は TS の CONST (構成役割) の値として導入され、通常の動詞では意味の中核をなすが、LCS のみでは、本発表で議論するようなアスペクトの詳細や視点に関する意味については記述が困難であると考えられる。本表示ではそれらの情報を FORMAL (形式役割) の値として記述することができる。
- 慣習的推意のような非命題レベルの意味についても NTS に記述できる可能性を持つ。

(19) に示す、(18) の FORMAL にある「動詞の時間的特性」は、Igarashi & Gunji (1998)、郡司 (2004) の記述に基づく[3]。

(19) s : 行為開始時点　f : 行為完了時点兼状態開始時点　r : 状態終了時点
a. 着る: $s < f < r < \infty$
（$s < f : activity$　$f < r$: 行為完了時点で状態変化　$r < \infty$: 行為前状態への復帰）
b. 死ぬ: $s = f < r = \infty$
（$s = f : achievement$　$f = r$: 行為開始時点で状態変化　$r = \infty$: 行為前状態への復帰なし）
c. 歩く： $s < f = r < \infty$ （$f = r$: 状態変化なし，行為完了時点がそのまま状態終了時点）

[3]Igarashi & Gunji (1998)，郡司 (2004) では、「行為終了時点」後に「復帰」が定義されるが、本発表には直接関係しないので以降省略する。

3.3 「-ぬく」の意味構造

■ 概ね姫野 (1999) の「完徹」に対応する「ぬく」の意味表示

(20)
$$\begin{bmatrix} \textbf{\textit{-nuk}}_1 \\ \textit{ARGSTR} = \boxed{1}\ \text{VP}\begin{bmatrix} \text{FORMAL: } s < f_b = r \ \vee\ s < f_b < r \end{bmatrix} \\ \textit{QUALIA} = \begin{bmatrix} \boxed{2}\ \text{TS} = \begin{bmatrix} \text{FORMAL: } \textbf{POINT}: nuk\,(\boxed{1}) = f_b - s \\ \text{CONST: CONTROL}\,(x,\ \boxed{1}) \end{bmatrix} \\ \text{NTS} = \begin{bmatrix} \text{AGENTIVE: FEEL DIFFICULT}\,(z,\ \boxed{2}) \end{bmatrix} \end{bmatrix} \end{bmatrix}$$

(21) a. ARGSTR：補部となる動詞句が、継続的意味を表し、限界点が定義される (f_b) (FORMAL) 。
b. FORMAL：「ぬく」は補部イベントの開始から終了時までを視野とする。
c. CONST： 主語となる x が多かれ少なかれ補部イベントを制御 (CONTROL)[4]する。
d. AGENTIVE：話者や主語が「ぬく」を含むイベント全体の達成 ($\boxed{2}$) を困難であると認識している。

(22) 〜られぬく：「られ」が受動使役の「られ」である場合、「ぬく」の持つ CONTROL という性質に合致し、容認される（「られ」が受身の場合、制御性がないので、「ぬく」の CONTROL とミスマッチを起こし、容認性が落ちる)。

■ 概ね姫野 (1999) の「極度」に対応する「ぬく」の意味表示

(23)
$$\begin{bmatrix} \textbf{\textit{-nuk}}_2 \\ \textit{ARGSTR} = \boxed{1}\ \text{VP}\begin{bmatrix} \text{FORMAL: } s = f_{ub} < r \\ \text{CONST: EXPERIENCE}\,(\,x, [\text{BECOME}\,(x, [_{Psych.State} \quad])]\,) \end{bmatrix} \\ \textit{QUALIA} = \begin{bmatrix} \text{TS} = \begin{bmatrix} \text{FORMAL: } \textbf{POINT}: \text{nuk}\,(\boxed{1}) = f_b - s \\ \text{CONST: } \phi \end{bmatrix} \\ \text{NTS} = \begin{bmatrix} \text{AGENTIVE: }(z,\ \boxed{1}_{ub \to b}) \end{bmatrix} \end{bmatrix} \end{bmatrix}$$

(24) a. ARGSTR：「弱る」「困る」等の心理動詞 (CONST) が主要部となる、変化自体は瞬間的だがその限界点が定義されない (f_{ub}) 動詞句 (FORMAL) を補部として選択する。
ex. ケンはだんだん困っていった。 cf. *ケンはだんだん死んでいった。
b. AGENTIVE：主語や話者 (z) が (主観的に) 補部イベントに限界点を付与する。
c. FORMAL： その「主観的に定められた限界点」までを累積捜査する。
→ その限界点が何らかの形で示される必要がある (→ 17)
ex. ケンはその問題に {?困りぬいた / 困りぬいていた / 困りぬいて、上司に相談した }。
d. CONST：「ぬく」自身はアスペクトを表す以外に具体的な意味内容がなく、補部との意味合成 (単一化) の際には、補部イベント ($\boxed{1}$) がそのまま代入される。

4 まとめと展望および課題

まとめ

- 統語的複合動詞「V-ぬく」を形成する「ぬく」は、意味構造としては多義であるが、いずれも VP 補文をとる。
- 「ぬく」の語彙登録としては、補部イベントに対する制御性を持ち、補部イベントの完遂が困難であるという非命題的意味を持つ形態素 (こちらの方が多数派) と、心理動詞句を補部として、心理状態の程度に対して主観的に限界点を付与する形態素の２つがある。
- 制御性のない (むしろ制御される側を主語にとる純粋な) 受身の「られ」は補文内に生起できず、受動使役の働きをもつ「られ」のみが補文内に生起でき、「〜られぬく」は全体として使役的な意味を持つ。したがって「わざと」や「〜てやる」等の表現と共起しやすい。
- 「V-ぬかれる」の場合、「ぬく」の主語は補文の主語であり、文全体の主語は専ら影響を受ける側であるため、通常の受身の解釈がなされる。

[4] この CONTROL は概ね影山 (1996) の「責任性」という概念に相当すると考えているが、定義の詳細は今後の課題である。

帰結と展望

- 先行研究における「完徹」と「極度」の分類を再編成することになる。
- nuk_1 は本動詞「抜く」の持つ意図性や制御性を保持している一方、nuk_2 は構成役割 (CONST) に意味が登録されておらず、意図性や制御性を持たない。文法化の観点から見ると、nuk_2 の方がより文法化が進んでいると言えそう。
- ただし、補部が心理動詞に限られるため (明確な理由は不明だが、意図性・制御性はなくとも主語が「外項」であることを保持しているのかもしれない)、同じように完徹や極度を表す「V-きる」(ex. フルマラソンを走りきる / 冷え切った朝) と比べるとやや文法化が進んでいないと言えるかもしれない。
- 以上のことを踏まえると、文法化の観点から見た場合、姫野 (1999) 等がいうような分類と本発表における分類のどちらが妥当かを比較検討することが可能になり、「抜く」の文法化過程を探る足がかりとなる。
- 本発表の意味表示を用いれば、「ぬく」と同様に形態的には他動詞の形をしていながら、制御性がより弱いと思われる「V-通す」や「V-切る」等との意味的類似点や相違点についても、より明示的に比較・分析できるものと期待される。

課題

- 本発表での「ぬく」の分類が (歴史的な) 文法化の過程を反映しているかどうかを検証すること。
- 同じく意図性・制御性を持つと考えられる「V-直す」や、「〜られ V」の形を許容する複合動詞に対しても同様の分析が可能かどうかを検証すること。
- もとは同じ他動詞の形をしているのに、「V-通す」「V-切る」「V-終える」「V-ぬく」等は、意図性・制御性の漂白の度合いが異なるように思われるが、その理由や過程について分析・考察すること。

参考文献

郡司隆男 (2004). 「日本語のアスペクトと反実仮想」. *TALKS: Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin*, **7**, 21–34.

畠山雄二, 本田謙介,・田中江扶 (2018). 「使役を表す「受動文」」. 『言語研究』, **154**, 193–204.

Hidaka, T. (2011). *Word formation of Japanese V-V compounds*. Ph.D. dissertation, Kobe Shoin Women's University.

姫野昌子 (1980). 「複合動詞 「〜 きる」 と「〜 ぬく」,「〜 とおす」」. 『日本語学校論集』, **7**, 23–46.

姫野昌子 (1999). 『複合動詞の構造と意味用法』. ひつじ書房.

Igarashi, Y. & Gunji, T. (1998). The temporal system in Japanese. In Gunji, T. & Hashida, K. (Eds.), *Topics in constraint-based grammar of Japanese*, pp. 81–97. Kluwer.

影山太郎 (1993). 『文法と語形成』. ひつじ書房.

影山太郎 (1996). 『動詞意味論: 言語と認知の接点』. くろしお出版.

影山太郎 (2006).「日本語受身文の統語構造–モジュール形態論からのアプローチ」.『レキシコンフォーラム No.2』, pp. 179–231. ひつじ書房.

岸本秀樹 (2013). 「統語的複合動詞の格と統語特性」. 『複合動詞研究の最先端–謎の解明に向けて』, pp. 143–184. 東京: ひつじ書房.

森田良行 (1989). 『基礎日本語辞典』. 角川書店.

Pustejovsky, J. (1995). *The Generative Lexicon*. MIT Press.

城田俊 (1998). 『日本語形態論』. ひつじ書房.

杉村泰 (2013). 「コーパスを利用した複合動詞「V1-抜く」の意味分析」. 『言語文化論集』, **35** (1), 49–63.

白石知代・松田文子 (2014). 「多義動詞「ぬく」のコアとそれを用いた複合動詞「V-ぬく」の意味記述」. 『日本語教育』, **159**, 1–16.

Washio, R. (1993). When causatives mean passive: A cross-linguistic perspective. *Journal of East Asian Linguistics*, **2** (1), 45–90.

Washio, R. (1995). *Interpreting voice; a Case study in lexical semantics*. Kaitakusha.

由本陽子 (2005). 『複合動詞・派生動詞の意味と統語』. ひつじ書房.